員弁郡東員町大字中上

新野遺跡発掘調査報告

— C 地 区 —

1972

三重県教育委員会

序

北伊勢地域のなかでも，員弁川流域は縄文時代にはじまり，各時代の遺跡の多いところである。

この地域においては，近年，内陸部の工場，住宅団地等の開発事業が急速にすすめられ，影響をうける各種の遺跡も増大している。そのため，すでに昭和44年度においては，国庫補助金の交付をうけて，「三重用水農業水利事業地域遺跡分布調査」として遺跡分布の再調査をおこない，さらに昭和45年度においては，日本建築学会東海支部都市計画委員会に委託し，「北伊勢地域埋蔵文化財保全計画」をたてるなど，遺跡所在地の周知徹底をはかるとともに，開発事業計画に対しても，関係市町村教育委員会とともに，適時，協議して，遺跡の保護につとめている。

ここに報告する員弁郡東員町・新野遺跡は，西方の同町・西山遺跡とともに，町の工場誘致により消滅することとなったため，止むを得ず発掘調査したものである。すでに，西山遺跡と新野遺跡の西半分については，町教育委員会において，会社側の経費負担により調査されているが，調査中において，当初の予想に反し，この新野遺跡がさらに広がっていることがわかり，国庫補助金の交付をお願いして調査を実施した。

報告書を刊行するにあたり，町当局をはじめ，地元関係者各位に謝意を表するものである。

昭和47年3月

三重県教育委員会
教育長　関　根　則　之

例　　言

1．本書は，神奈川県・日東タイヤＫＫの工場用地造成計画にともない，三重県が国庫補助金の交付をうけて実施した，員弁郡東員町大字中上・新野遺跡Ｃ地区の緊急発掘調査の結果をまとめたものである。

2．調査は，三重県教育委員会が主体となり，三重県文化財専門委員・三重大学教授服部貞蔵氏の指導をうけ，文化課小玉道明・下村登良男・山沢義貴・谷本鋭次が担当した。

3．調査には，三重県企画部開発課，東員町教育委員会，三和小学校および地元中上区のご協力をうけた。

4. スキャニングによるデーター取り込みのため、若干のひずみが生じています。各図の縮尺率はスケールバーを参照ください。

目　　次

Ⅰ　調査の経過……1

Ⅱ　遺跡の概況……3

Ⅲ　C地区の調査……5

Ⅳ　結　　語……12

図　　版

1　新野遺跡地形図

2　C地区平面図

3　(1)A地区全景 (2)B地区全景

4　(1)C地区全景 (2)C地区近景

5　(1)掘立柱建物群 (2)SB 307 SB 308
(3)SB 307

6　(1) SB 309 (2)SB 315 SK 320

7　(1) SK 313 (2) 出土遺物

8　出土遺物実測図

挿　　図

第1図 新野遺跡の位置

表

第1表 掘立柱建物址の規模

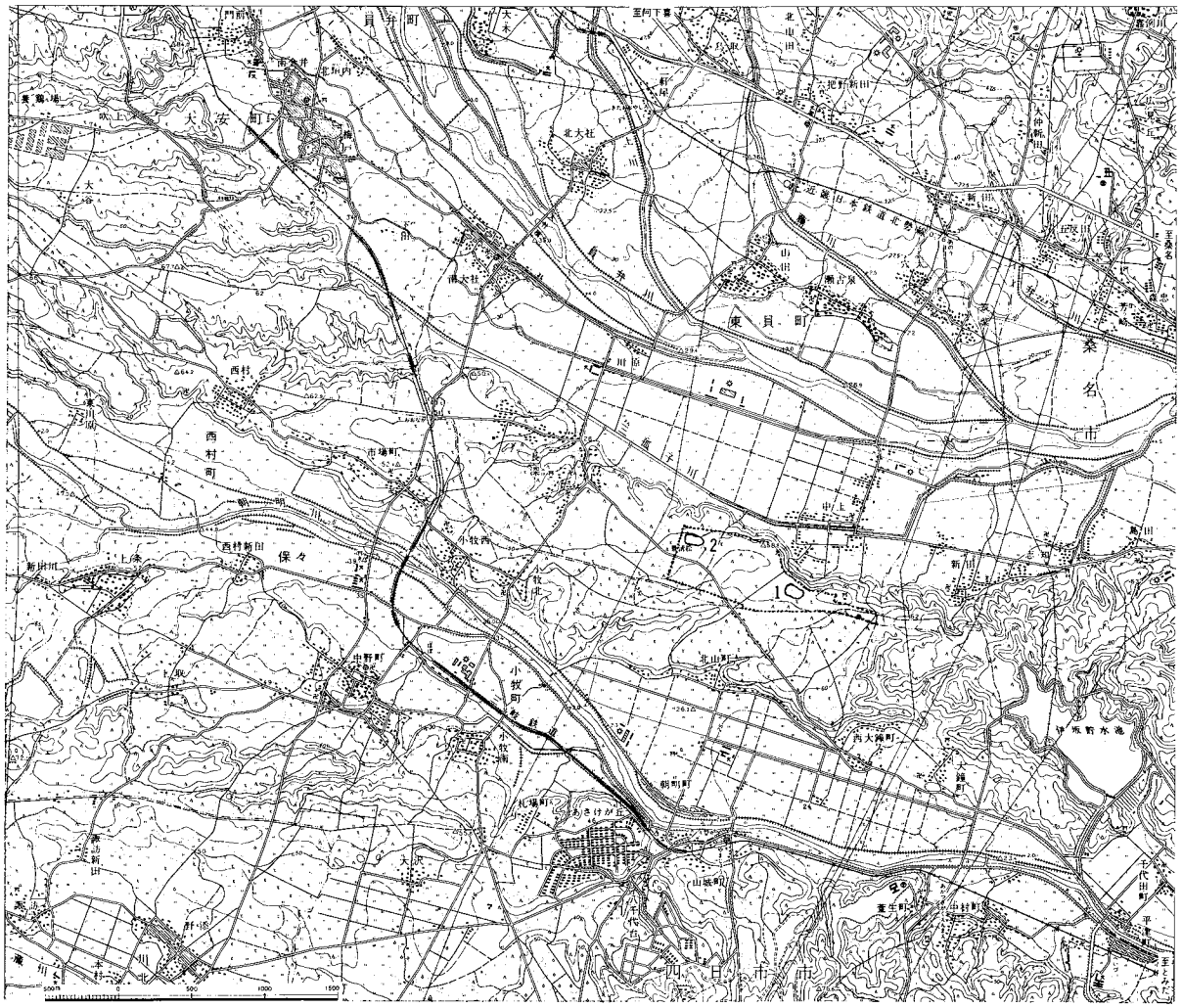
第2表 竪穴建物址の規模

新野遺跡C地区発掘調査報告

Ⅰ．調査の経過

三重県の北部を流れる員弁川の中流域の南岸の台地上に，今回，調査することとなった新野遺跡をはじめ，いくつかの遺跡のあることが知られたのは，この数年来のことである。[1] これらの遺跡は古墳や中世城址のように地上に構築物の残っているものではなく，台地上の畑の各所に各時代の土器片が散布しているだけで，あまり注意もはらわれない場合が多い。

こうした地域へ，神奈川県・日東タイヤＫＫの工場進出が協議された昭和44年当初においても，あまり遺跡について留意されなかった。しかしその後，工場進出計画が具体化されるとともに，進



第１図　新野遺跡の位置　（1 新野遺跡　2 西山遺跡　国土地理院・菰野 1：2.5万）

出予定地には西山遺跡，新野遺跡，花戸城址のあることが判明し，県開発課，町企画開発課，県，町各教育委員会，会社の間においてその保護策を協議することとなった。

昭和45年５月には，再度，工場進出予定地の遺物散布状況確認調査をおこない，試掘調査をおこなうこととなった。

分布調査では，約 6.5万m²の広大な範囲の遺跡と考えられたが，同年８月から９月にかけておこなった試掘調査により，工場進出地の西端の西山遺跡では約3000m²，東端の新野遺跡は約 2,000m²の範囲が，遺物，遺構の密度の高いことがわかり，それぞれ全面発掘することとなった。

これらの調査は，東員町教育委員会が調査主体となり，現場作業は，三重県教育委員会社会教育課が担当した。その経費は日東タイヤＫＫにおいて負担された。

本調査の結果，西山遺跡においては，古墳時代末期から奈良時代に至る集落址で，竪穴住居址７ケ所，掘立柱建物址９棟，土坑21ケ所等が明らかになった。とくに土坑には，鍛冶用のものと思われるフイゴ羽口，鉄滓が多量に発見されたことが注目された。

また，新野遺跡では，同じく古墳時代末期から奈良時代にかけての集落址（Ａ地区）と，奈良時代から平安時代にいたる集落址（Ｂ地区）との二ケ所からなる遺跡と考えられ，それぞれ多数の建物址があきらかになった。しかし，その後，さらにＢ地区の東側へも遺跡がひろがることが考えられ，これを「Ｃ地区」として，昭和46年８月から９月にかけて，国庫補助金の交付をうけ，県教育委員会がおこなうことになったものである。

Ｃ地区の調査は，東員町教育委員会がすでに試掘し，ある程度，ブルドーザーにより表土除去された所を中心としておこなった。

調査に際しては，前町長三輪利夫氏，県会議員水谷正俊氏をはじめ，三和小学校山口一成氏，中上区小山林一氏等の格別のご協力をうけた。

II　遺跡の概況

新野遺跡は，北伊勢において鈴鹿山地から伊勢湾に流れる員弁川と朝明川にはさまれた標高 58 m前後の小島台地上にある。台地上は北から南へ傾斜し，北側の水田との比高は，約35 mである。遺跡は北寄りの縁辺部に近い所で，東西約 200 m，南北 120 mの範囲において，A地区，B地区，C地区の3ケ所にまとまっている。

(1) A　地　区

標高約58 mの台地上において，東西70 m，南北50 mの範囲に，古墳時代後期から奈良時代の竪穴住居址10ケ所，掘立柱建物址14棟，土坑8ケ所，鎌倉時代土坑2ケ所，堀2条がある。

竪穴住居址は，床面の片隅にかまどをそなえたものである。そのうちには床面の四隅に主柱穴をもっものもある。いずれも，掘り方は浅い。

掘立柱建物址は，6間×2間，5間×3間，4間×3間，4間×2間，3間×2間の規模様々のものがある。これらは南北棟にちかいものがほとんどで，日照面から考えると居住性に不適ともおもわれる。2間四面，3間×2間の平面が方形にちかい倉庫風のものもある。これらは建物群のうちでも西部にある。

出土遺物としては，須恵器杯，高杯，長頸壺，鉢，甕等各種のものがあり，土師器も杯，盤，高杯，甕，甑等がある。この他，銀環，陶硯も発見されている。これらは，とくに土坑から多く出土しているが，全体の量としては少ない。

鎌倉時代としては，土坑のうち2基が内部に多量の円礫をうめたものがある。亀山市辺法寺町・野元坂館址にも，同じような形状のものがみられる。遺物は少なく，少量の土器片のみにとどまりどのような用途のものか明らかでない。

(2) B　地　区

A地区の南東約60 mほど離れたところで，同じ台地上でも一段低くなっている。標高は52 mほどで，背後の北と西側は急斜面をなして，A地区にあたる高い台地面へつづく。全体にゆるやかな傾

斜地となっている。東西40ｍ，南北30ｍの範囲において，奈良時代から平安時代の掘立柱建物址５棟，竪穴４基，土坑４基，溝址３条等が明らかにされている。

掘立柱建物址は，４間×３間，３間×２間，３間四面のものがある。発掘区の南寄りではかなりの小穴が検出されているが，建物としてはまとまっていない。３間四面のものは，床束をともない，倉庫風のものである。

出土遺物は少ないが，各種の須恵器，土師器の他，鉄滓，土錘もある。

竪穴は平面が方形のもので，底面は平坦で建物址とも思われる。竪穴内からは，比較的多く遺物が出土している。

(3) Ｃ　地　区

Ｂ地区の東側に接した，東西50ｍ，南北25ｍの範囲のもので，北東から南西へ傾斜した所である。標高は55ｍ前後である。調査区域の東側では，地表に土器片の散布もほとんどみられず，試掘坑にも遺物，遺構とも検出されていない。

III　C地区の調査

1．遺　　構

遺構としては，掘立柱建物址，竪穴建物址，土坑，溝址などがある。これらは地表下40cm～90cmの黄褐色で礫まじりの固い地山面にみとめられた。調査区の地山上全体には，10cm～20cmほどのうすい遺物包含層がおおっていた。

調査区の中央には，鎌倉時代のものと思われるＳＤ 302溝が南北につづく。東半には掘立柱建物址がある。このうちＳＢ 321，309，308は，傾斜地でもほとんど同じ高さの所に並んでいる。土坑，竪穴建物等は傾斜地の下方にほとんどがみられた。また，ＳＢ309掘立柱建物の南側，及びＳＢ315掘立柱建物の西側では，小穴が多数検出されたが，建物址としてまとまっていない。

(1) 掘立柱建物址

ＳＢ 307　桁行３間×梁行３間の北西―南東棟。梁行の柱間は桁行柱間よりかなりせまく，また柱穴も径30cm～40cm，深さ20cm～30cmで小さく浅い。また南隅と西隅の柱穴はＳＤ 305溝により上面が削平されている。

ＳＢ 308　桁行３間×梁行２間の北東―南西棟のもので，他の4棟のものとは，棟方向がことなる。また柱間の寸法は，桁行，梁行とも等間である。柱穴は径30cm～50cm，深さ40cm～60cmで，方形ないし円形である。東側列の柱穴の一つから，須恵器長頸瓶の破片（図版８―13）が出土している。

ＳＢ 309　桁行３間×梁行３間であるが，桁行の柱間が梁行の柱間よりかなり広い北西―南東棟である。西入側柱列の柱穴は，ＳＤ 311，322溝によって上面が削平されている。柱穴は径45cm，深さ40cm～50cmの方形ないし円形のものである。

ＳＢ 315　４間×３間の北西―南東棟。桁行３間のＳＢ 307，308，309建物とほとんど規模は同じであるが，これは桁行が４間で，柱間もせまい。柱穴は径40cm×50cm前後，深さ45cm～60cmの方形にちかいものがおおい。

南側柱列の一つがＳＫ 220土坑と重複しているが，柱穴の埋土も土坑の埋土もほとんど同質の黒褐色土で，その前後は不明。

名称(ＳＢ)	規模（間）	桁行（m）	梁行（m）	棟方向	柱間寸法m	
					桁行	梁行
307	3×3	6.3	4.4	N47° W	2.1	1.5
308	3×2	6.0	4.4	N31° E	2.0	2.0
309	3×3	7.0	5.2	N54° W	2.3	1.7
315	4×3	6.3	5.1	N47° W	1.6	1.7
322	(3)×3	(6.0)	5.0	N56° W	2.0	1.7

第１表 掘立柱建物址の規模（）は推定

ＳＢ 322 西入側柱列は未掘である。桁行現長２間の４ｍであるが，その柱間の寸法から桁行３間，梁行３間のものと思われる。棟の方向は北西―南東である。柱穴は径45cm×50cm，深さ40cm前後の方形にちかい。

(2) 竪穴建物址

ＳＢ 303 面積14m²ほどの平面不整形な凹みである。床面もＳＤ 305溝などにより攪乱されたのか凹凸がひどく，建物かどうかは断定できないが，凹みの南縁に径50cmほどの地山が赤く焼けた面があり．一応，建物とした。遺物は少なく，須恵器の杯，甕，土師器甕の破片が少量うまっていた。

ＳＢ 304 東側はＳＤ 302溝により削りさられているが，方形にちかいものであろう。柱穴，かまどは明らかでないが，竪穴内には焼土粒，炭片が多くみられ，須恵器杯，蓋，甕，土師器甕などの破片がおおく埋まっていた。また，この竪穴だけ土錘が７個ほど出土している。

ＳＢ 316 面積が 8.5m²でやや南北に長い小形のもの。掘り方もあさく，傾斜地上方にあたる北辺は30cm，下方の南辺ではわずか５cmにどまる。床面の西隅には，50cm× 100cmほどの範囲に，焼土粒・炭片をおおくふくむ面がみられた。しかし床面より遊離していて固定したかまど址とは思われないが，竪穴内で火を使用していたことをおもわせる。床面に柱穴はみとめられない。竪穴の周囲のうち西側以外の三方には，径40cm前後，深さ30cmほどの小穴がいくつかあるが，この竪穴にともなうものかどうかは不明。

竪穴内には，須恵器杯，蓋，甕，土師器杯，鉢，甕などの破片が多量にうまっていた他，灰釉の椀

皿の破片もかなりみられた。

竪穴の北側には接してＳＥ 319井戸があり，この井戸に付属した厨房的な機能をもった建物ともおもわれる。

名称(ＳＢ)	規模(m)			東西軸	出土遺物
	東西	南北			
303	4.5	3.5	10~20	—	須恵器・杯・土師器・甕
304	4.0	—	20~25	N48° W	須恵器・杯・蓋・土師器・土錘
316	2.6	3.3	5~30	N65° W	灰釉・椀・皿・土師器・鉢・甕
321	4.0	3.6	13~17	E — W	須恵器・杯・蓋・土師器・甕

第２表　竪穴建物の規模

ＳＢ 321　平面が方形にちかく浅いもので建物かどうか断定できない。西辺はＳＤ 318溝により削平されている。竪穴内には径30cm～50cm，深さ25cmほどの小穴がいくつかある。須恵器杯，甕，土師器の小片が比較的多くうまっていた。

(3) 井　戸　址

ＳＥ 319　ＳＢ 316竪穴住居址の北側に接してつくられたものである。直径1.2m×1.1mの平面円形の素掘りのもので，井戸枠等の施設は不明。現地表面下約 2.5mほどまで排土したが，底面まで掘り下げるに至らなかった。排土中から，須恵器，灰釉陶器片がかなり出土している。これらの遺物は，この井戸が廃絶されて後，混入したものであろう。上面はＳＤ 318溝址によって削平されている。

(4) 土　　坑

ＳＫ 306　東縁は未掘で，南北 2.9m，深さ10cmほどの浅いもの。埋土はチョコレート色の比較的粘質のもので，少量の須恵器，土師器片がうまっていた。

ＳＫ 310　径 1.6m× 2.1m，深さ56cmほどの東西にながいもの。掘り方の壁面は，南側が垂直にちかくなっている。埋土は「黒ボク」風褐色のもので遺物をふくんでいない。

ＳＫ 313　1.6m× 2.1mの東西に長い平面が長方形のもの。深さは全体に25cmほどで，底面が比較的平坦であるが，北東隅では70cm×90cmほどの方形でさらに13cmほど深くなっている。土坑内

には，多量の焼土粒や小塊，炭片がうまり，大形のフイゴ羽口，鉄滓，天目茶椀，すり鉢などの破片が出土した。

ＳＫ 320　1.4ｍ× 2.7ｍ，深さ85cmほどでこれも東西に長いもの。掘り方の壁面は西，北，東の三面はなだらかであるが，南壁はきわめて急になっている。埋土は黒褐色土で遺物をふくんでいない。

ＳＫ 324　1.2ｍ× 3.0ｍ，深さ80cmほどの東西に長いもの。ＳＫ 310土坑と同様，掘り方の壁面のうち南側がきわめて急となっている。埋土は黒褐色で，遺物をふくまない。

(5) 溝　　址

ＳＤ 302　調査区の中央を北から南へつづくもの。巾 2.0ｍ，深さは北端が60 cm で南へ下るにしたがい次第に浅くなって40cmほどとなる。埋土は地山土とほとんど同質の砂質黄褐色で，須恵器，灰釉陶器，土師器の破片の他，山茶椀，常滑焼の甕片などがうまっていた。

この溝址とほとんど重複して，現在の畑の細いが比較的深い溝が掘られていた。これは，調査区の西端のＳＤ 317溝でも同様で，古い溝が現在の畑区画にも利用されていることを思わせる。なお，ＳＤ 317溝は，西隣のＢ地区につづくもので，その巾は 6.5ｍ，深さは60cmほどの浅いが，巾広いものである。

ＳＤ 305　調査区の東端において，北西から南へ途中で曲ってつづくもの。巾80cm～95cm，深さ25cmほどである。埋土は褐色土で，少量の各種の土器片をふくむ。

ＳＤ 311　ＳＤ 302溝の東側に沿ってつづくもの，部分的にＳＤ 302溝の掘り上げによる土砂で埋められたように，礫まじりの土砂がおおっていた。巾90cm，深さ15cm前後のあさいもの。

ＳＤ 312　ＳＤ 311溝と北端で重複するが先に掘られた巾 0.7ｍ～ 1.3ｍ，深さ25cmほどのものである。壁面は鋭く掘りこまれ，埋土は茶褐色土である。ＳＤ 311溝と同様，少量の須恵器，灰釉陶器，土師器の破片がうまっていた。

ＳＤ 318　調査区の西端のＳＤ 317大溝の東に沿ってつづくもの。北半では巾 1.5ｍ，深さ25cm，南半では巾95cm，深さ20cmである。この溝とＳＢ 316建物と重複するところでは，埋土の切り合い

から先に掘られていたものである。また，この溝も部分的に，礫まじりの土でおおわれていたが，これは西側のＳＤ 317大溝の掘り上げた土砂によるものであろう。

2．遺　　物

調査区の各所から比較的少量の須恵器，灰釉陶器，土師器の破片，土錘等が出土している。これらの破片は小さく，とくに土師器では器形の判別できないほどのものが多い。

須恵器では杯が3種，蓋2種に大別され，他に長頸瓶，平瓶，大小の甕がある。焼成がわるく器表が剝落するほどの生焼け品もみられ，また，堅く焼成されているが，いわゆるねずみ色の須恵器質でなく，褐色ないし茶色のものもある。灰釉陶器では，椀，段皿，皿，瓶がある。土師器は量としては須恵器，灰釉陶器より少なく，杯，皿，鉢，甕が出土している。

須　恵　器

杯　（1—8，11—12）　1—3のように広い底部に，体部が直線状をなして口縁部となるもの，4—7のように腰部が丸味をしめすもの，11—12のように高台をもつものとがある。8は糸切底のもので，他のものと全く異る。全体にていねいに水引きされているが，2，7は底部がヘラ切り不調整である。

蓋　（9—10）　有鈕のものである。いずれも天井部はヘラ削りされている。10は環状の鈕のもので，他にも破片が1点出土している。

椀　形は灰釉の椀と同じであるが，全く施釉されていない。体部はていねいに水引きされ，底部もていねいにヘラ削り仕上げされ，高台のつくりもよい。

長頸瓶　（13）　巾広い断面台形の高台をもつ胴部から底部の破片である。器表と底部上面には，緑味の褐色の釉がみられる。底部下面の仕上げは粗雑である。

壺　（24）　太く短い頸部の断片。体部は球状の丸いものであろうか。頸部の器表には黒色の吹き出し釉がみられ，内面には褐色の釉が剝落している。肩部は平行のタタキ目，内面はなでて仕上げられている。

甕　(25)　広い頸部のものである。これも器表の内外に褐色の釉がみられる。

灰　釉　陶　器

椀　(14—18)　14は大形の高台をそなえ比較的深いものである。他は径14cm～17cm，高さ5cmほどの浅いものがおおい。高台はていねいに仕上げられ，体部の水引きもよく，底部近くではするどくヘラ削りされている。口縁部の外側と，体部内側に施釉されている。とくに15では内面に厚く灰釉がみられる。

段皿　(20—11)　20は，径18.5cm，高さ3cmで，口縁部が屈曲してツバ状に広く水平近くなるもので，腰部も稜をしめす。内面にのみ厚く施釉されている。21は径14.5cm，高さ2cmで，内側に段をしめすものである。これも内面にのみうすく施釉されている。

皿　(22—23)　径14cm～15cm，高さ2.5cm～3cmで広い高台をもつ。器壁はうすく，ていねいに水引きされている。内側にのみ施釉されているが，ほとんど剝落している。

土　師　器

皿　(26)　径約16cm，高さ2.0cmの浅いもの。器表は剝落していて調整は不明だが，広い底部は凹凸がはなはだしい。

鉢　(27—29)　径約19cm～24cm，高さ6cm～5cmの輪積みの直口状のものである。破片が小形のため，口径は確かでない。底部も平底をなすと思われるが，体部に比べ極めて薄く形状は明らかでない。胎土には5mm大の砂粒を多くふくみ，焼成もやわらかく，粗雑なものである。これらはSB 316竪穴から出土していて他にも数個体分の破片がある。

甕　(30—33)　30は体部が内外ともハケ目調整された大形のものであるが，他は器壁の薄い小形のものである。31—33は器表が剝落していて調整は不明。口縁端部は小さくひき出されている。

土　　錘

35—39　径1.4cm前後，長さ4.8cm前後のものと径1.3cm前後，長さ5.4cm前後の中太りで，細

長のものである。いずれも孔径は 0.3㎜前後である。焼成はやわらかく，表面は剝落しやすい。ＳＢ 304竪穴から出土している。他に同巧のものが 1.5個分ある。

フイゴ羽口

40 径 7.5cm×8cm，現長 8.5cmの円筒状のもので，孔径は 2.5cmである。先端には全面に鉄が溶融して，鉄滓とともに付着している。口縁部径約34cmの器壁のうすいスリ鉢とともにＳＫ 313土坑から出土したものである。この土坑には他に鉄滓が2個うまっていた。Ｃ地区ではこの土坑以外に羽口，鉄滓等鍛冶の遺物は出土していない。

Ⅳ 結　　語

新野遺跡は，同じ台地上でも一段高いＡ地区が古墳時代末期から奈良時代にいたる村落址であり，低い所のＢ地区が奈良時代から平安時代，今回，調査したＣ地区が平安時代の村落址である。時代をおって村落の占地が移動していることになる。

Ｃ地区は，建物址として掘立柱建物が主となっている。この建物はいずれも身舎のみで廂をそなえない。柱間は，桁行，梁行ともに３間であるが，北西―南東に長い棟で，その棟方向は比較的統一されているようである。柱通りは不揃いで，柱穴もあまり大きくない。傾斜地に建てられるが，同じ建物で傾斜地上方も下方も柱穴の深さはほとんど同じである。ＳＢ 307のように，梁行の柱穴が桁行のものより小形のものもあるが，他のものは桁行とも大きさが同じである。建物の規模からは居住用のものとおもわれる。

ＳＢ 304，316などは，単なる竪穴というよりは，掘立柱建物，井戸等の付属的建物址とおもわれる。[2] 掘立柱建物ではほとんど遺物がみられず，柱穴内や周囲に少量の土器片が出土したにとどまり，これら竪穴内におおくみられることから，建物としての機能のちがいをおもわせる。時期はくだるが，鈴鹿市・東庄内Ｂ遺跡ＳＫ 336土坑が好例である。[3]

日用雑器として，従来の須恵器，土師器の他，かなりの量の灰釉陶器がみられる。須恵器のうち杯類には，平底に近いものと，高台付のものがある。これらのうち，**図版８―３～７**はやや先行すると思われるが，Ｃ地区でも初期のものである。なお，西隣のＢ地区ではこの時期のものがおおい。

灰釉陶器は，厚く施釉されたものも数点ある。椀，皿，瓶の類であるが，とくにＳＢ 316竪穴から多く出土している。施釉されていない**図版８―19**の須恵器椀，同―８の糸切り底の杯などは，灰釉陶器と伴出していて，なお須恵器の併用されていたことが知られる。

土師器は，須恵器，灰釉陶器等より量も少ない。このうち**図版８―27～29**の鉢は小片で全体の形はたしかでないが，他の土師器と比べ，焼成も形態も全くことなり，独特なものである。ほぼ同時期の度会郡御薗村・高向Ｃ遺跡からも多量に出土している。高向Ｃ遺跡では極めて多量の土師器椀とともにみられるが，用途は不明である。[4]

これら出土品からみれば，C地区の村落は平安初期にはじまり，平安時代前期に最盛期むかえていることが知られる。その後，鎌倉時代では，傾斜地を区画するような溝址と，鍛冶用の土坑にとどまり，建物址はみられない。ある程度の集落のあったことは考えられるが，間もなく廃絶したのであろう。

註

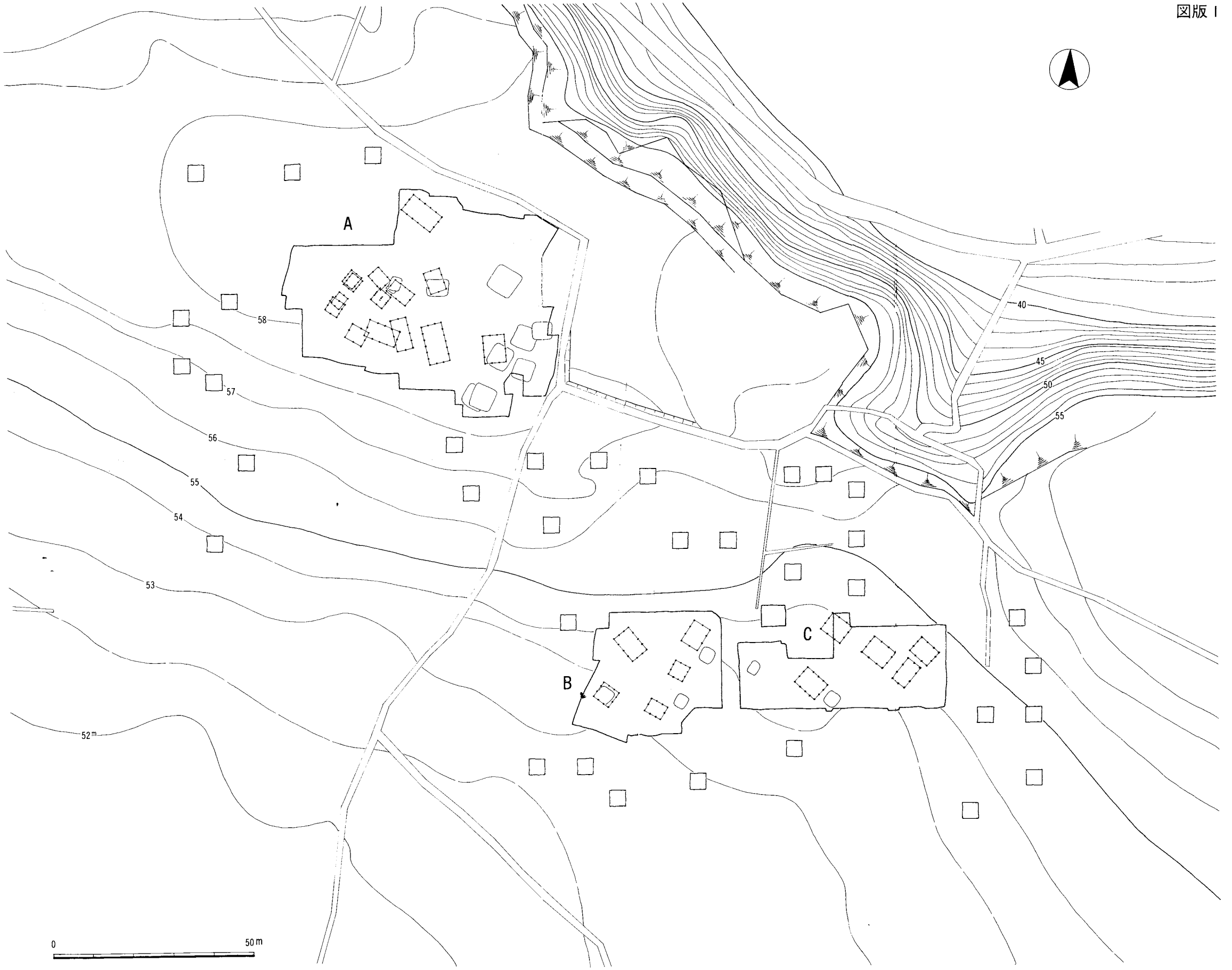
(1) 三重県教育委員会『三重用水農業水利事業地域遺跡地図』1970

(2) かまどをそなえず，柱穴も明確でないが，一応建物址と考え「竪穴建物」とした。なお平安初期の竪穴住居としては，四日市市・智積遺跡，度会郡御薗村・高向A遺跡，同高向C遺跡が知られている。これらはかまどをそなえるが，柱穴は明確でない。

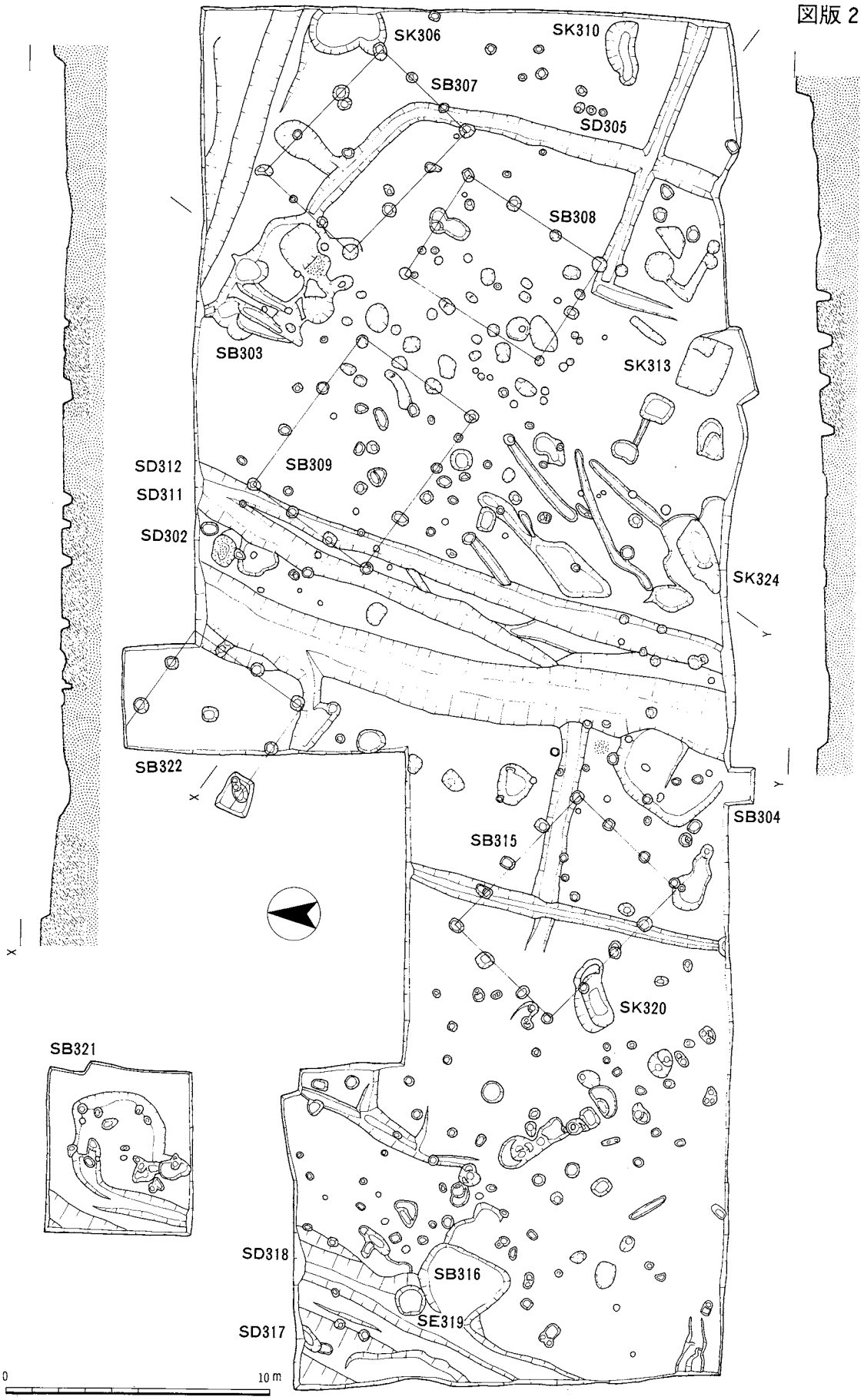
(3) 日本道路公団名古屋支社，三重県教育委員会『東名阪道路埋蔵文化財調査報告』所収「東庄内遺跡」 1970

(4) 南勢バイパス建設のため，昭和47年1月，建設省中部地方建設局の委託により，三重県教育委員会が調査中。

図　　版



新野遺跡地形図（1：1000・地形図原図は東員町日東用地実測平面図1：500による）


SK306
SK310
SB307
SD305
SB308
SB303
SK313
SD312
SD311
SD302
SB309
SK324
SB322
SB304
SB315
SK320
SB321
SD318
SB316
SE319
SD317
0
10m

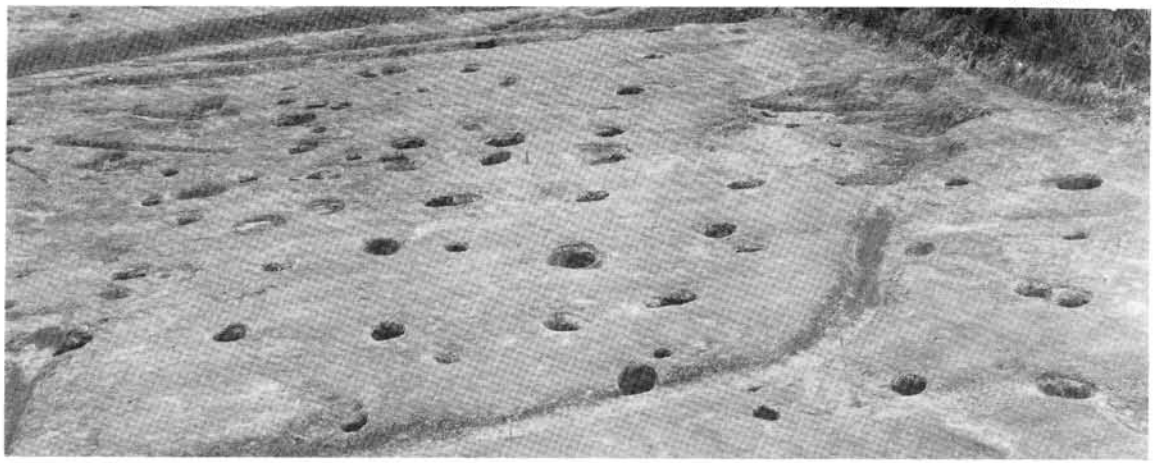
C地区平面図（1：200）

(1)　A地区全景（南東から）

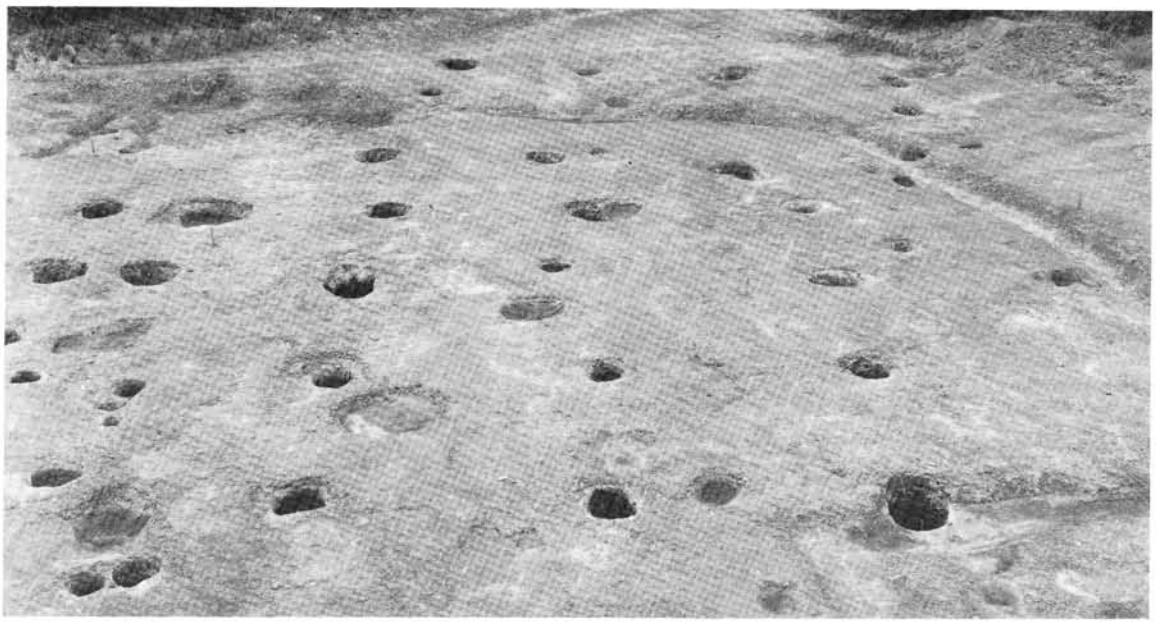
(2)　B地区全景（北西から）

(1)　C地区全景（東から）

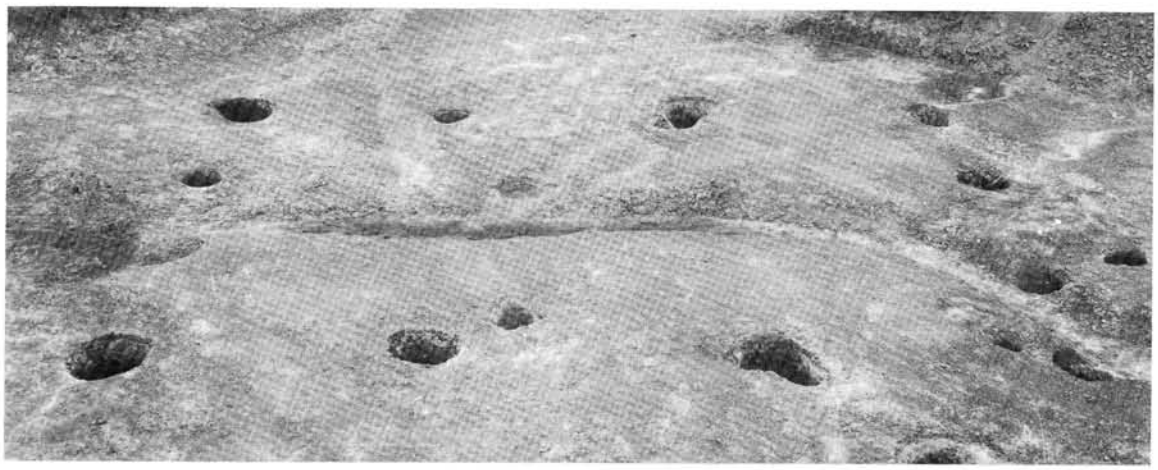
(2)　C地区近景（南西から）



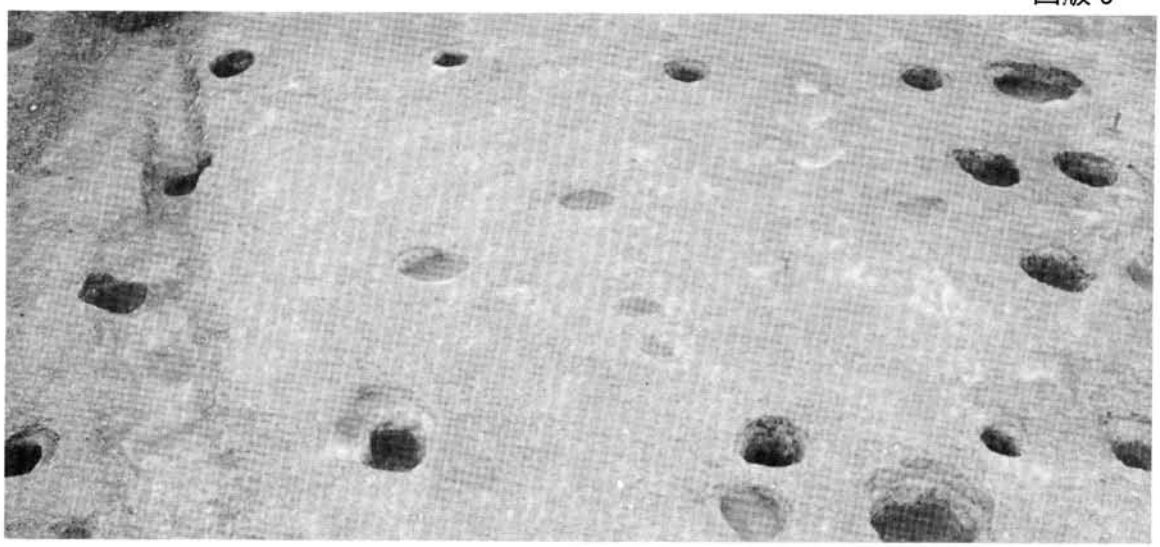
(1) 掘立柱建物群（南西から）



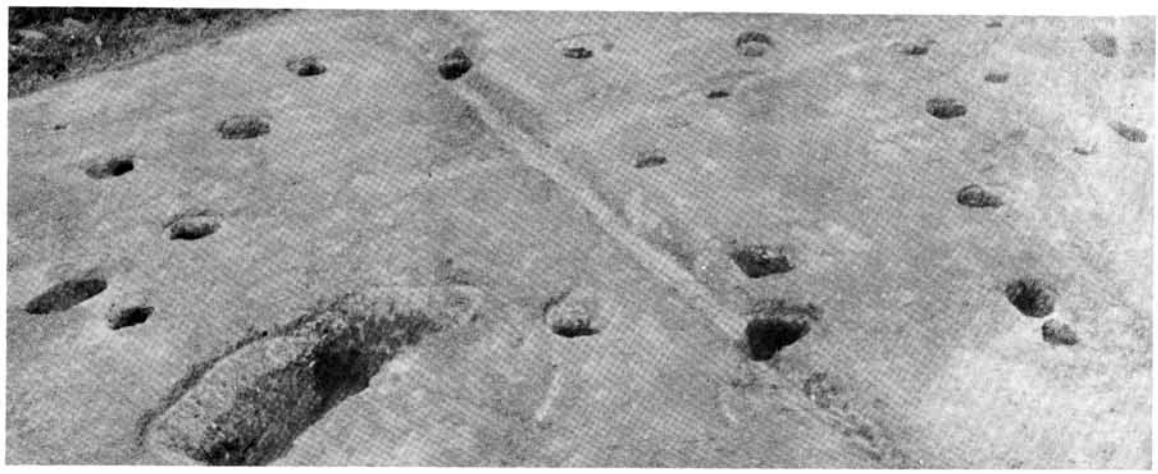
(2) SB 307・上方 SB 308・下方（南西から）



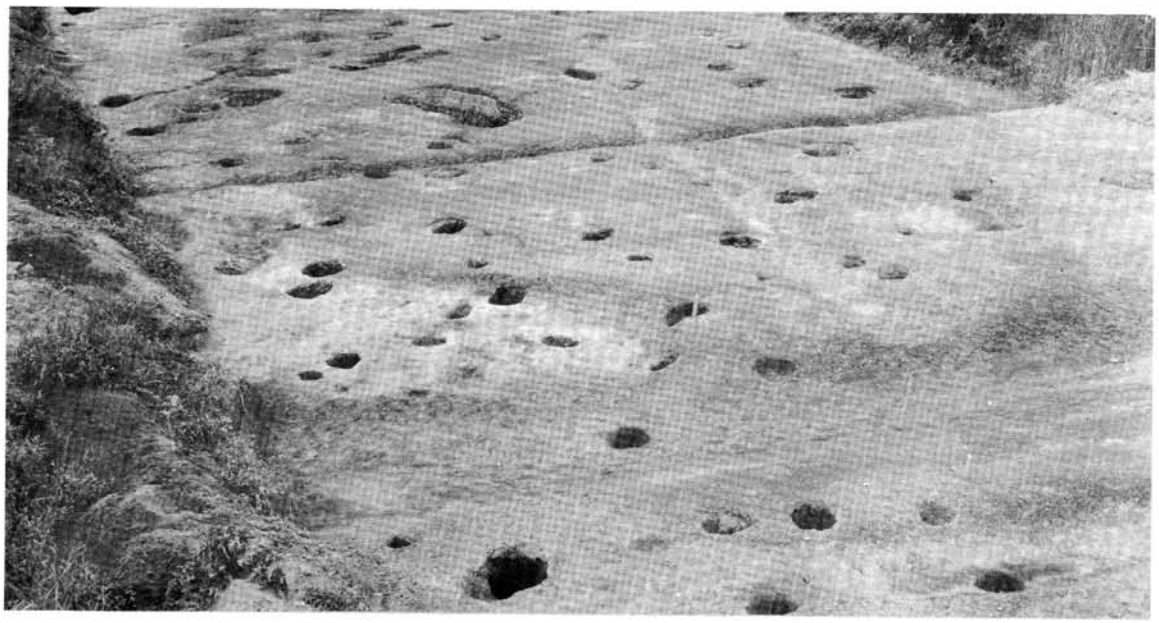
(3) SB 307（南西から）



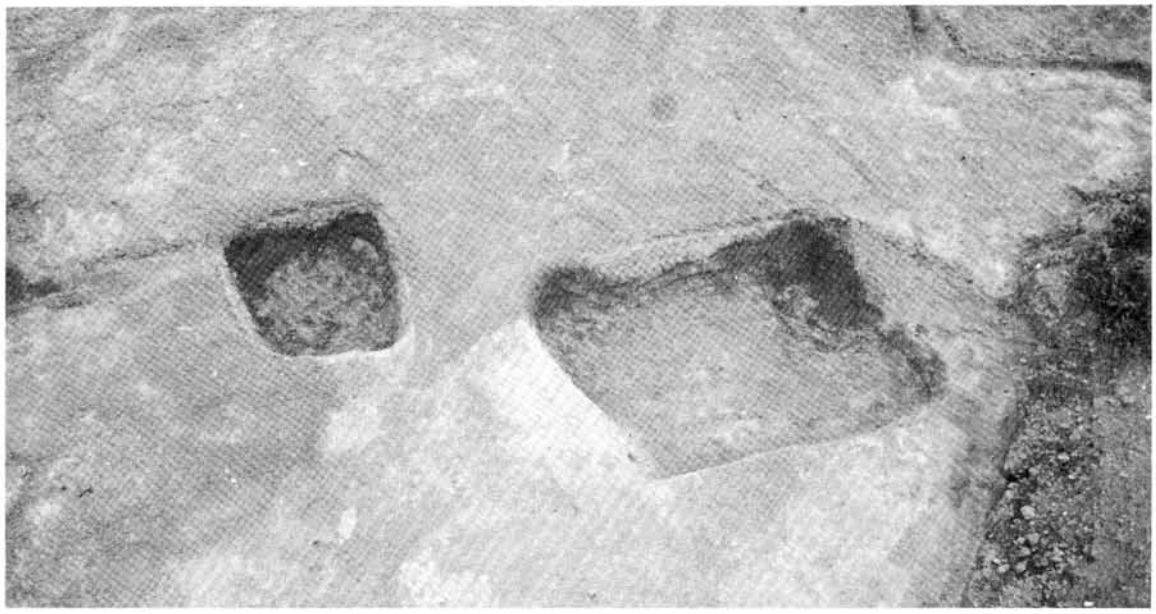
(1) SB 309（南西から）



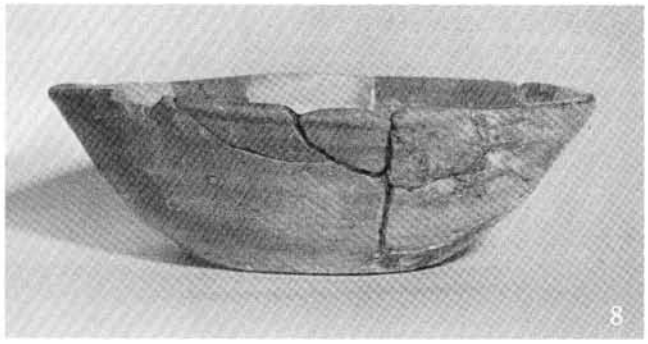
(2) SB 315・SK 320（南西から）

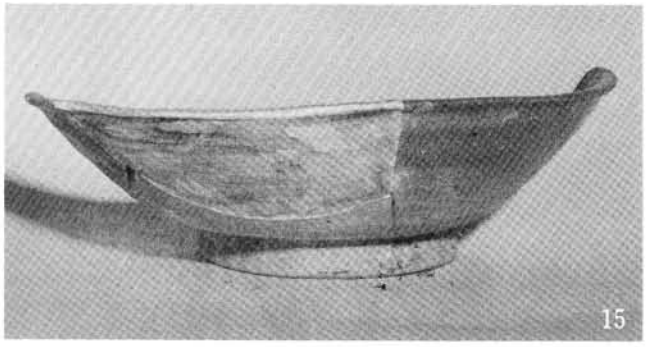


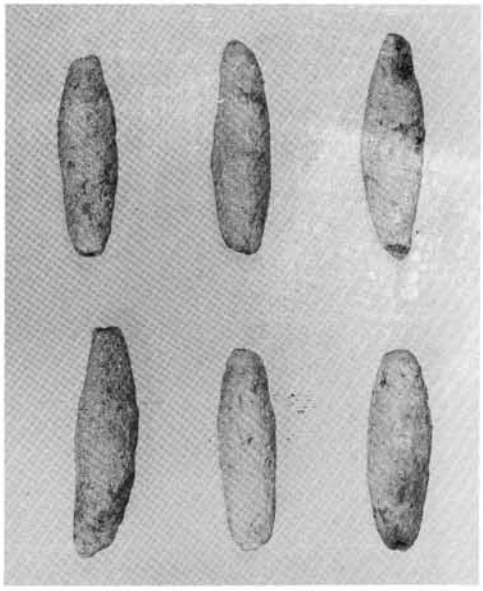
(3) SB 315・SB 304・SD 302（南東から）

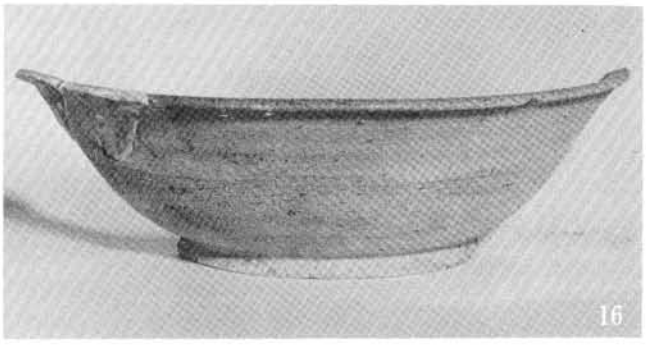


(1) SK 313（南から）

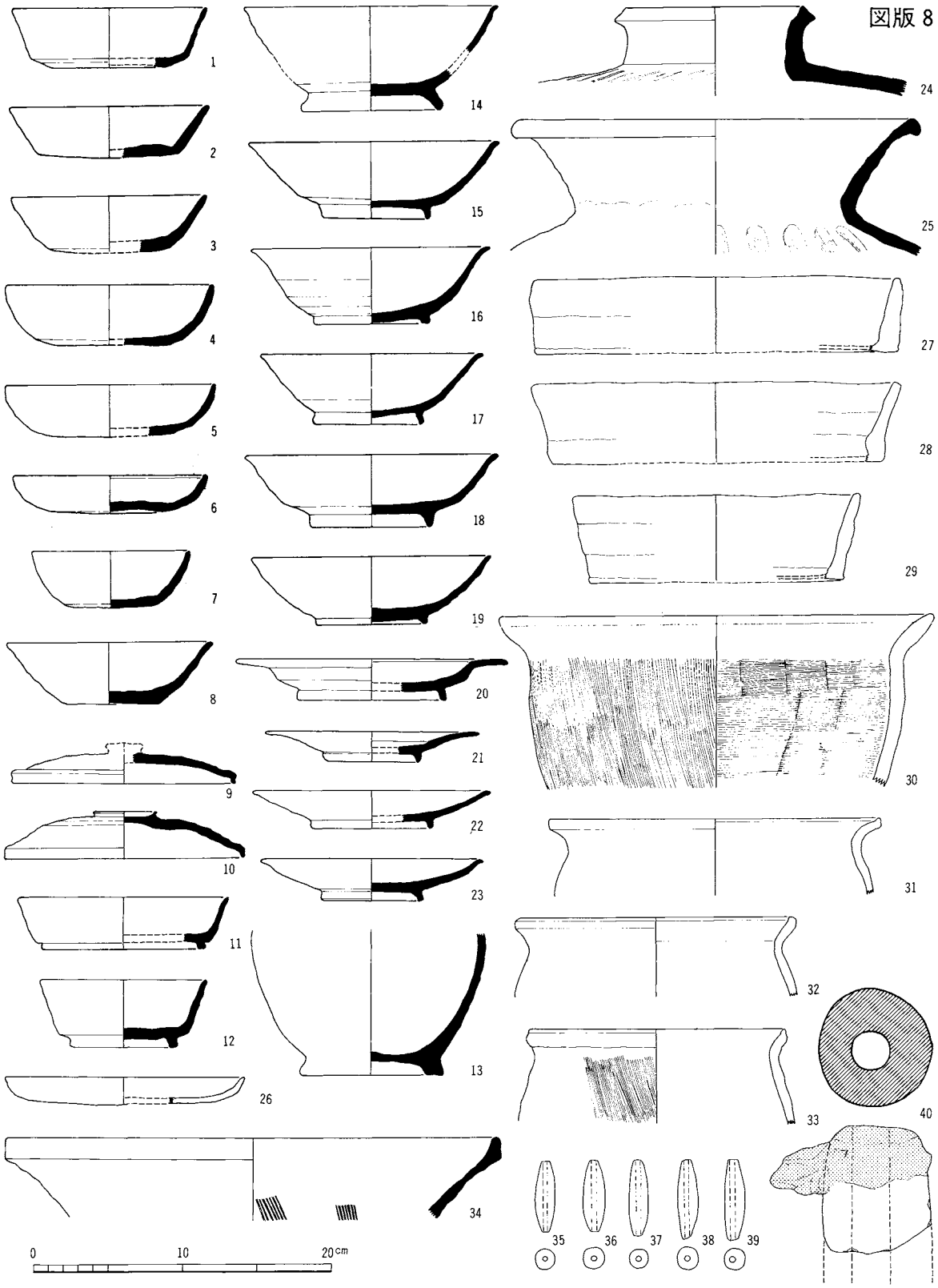








(2) 出 土 遺 物



出土遺物実測図（１：４）

ＳＢ 303：4　12
ＳＢ 304：3　10　35～39
ＳＢ 316：15　16　20　23　27～32
ＳＢ 321：7
ＳＫ 306：1
ＳＫ 313：34　40

ＳＢ 308：13
ＳＢ 309：(14　18　21　22　25　26)
その他　：2　5　6　8　9　11
17　19　24　33

(　)はその建物周囲から出土

昭和47（1972）年３月に刊行されたものをもとに
平成16（2004）年10月にデジタル化しました。

三重県埋蔵文化財調査報告 9

新野遺跡発掘調査報告－C地区－

１９７２年３月３０日

編集・発行　三重県教育委員会

印　　刷　光　出　版　印　刷
松阪市京町１区１４の６
電話 松阪（05982）(2)2923(代)